

檜枝岐村の価値観

はじめに

今回、教室で座って聞く講義や自身で調べるといった段階から飛び出し、実際にフィールドへ出向いて調査を行うことができた。フィールドワーク先に檜枝岐村を選択した理由としては、本学の講義の題材として扱われていた際に、私の思う「普通」とかけ離れていたためである。実際に現地に住んでいる方はどのような方なのか。現地はどんな空気なのか。また、私たちの事前調査とどのような差異があるか、またそれはどうして生まれるかなど、様々な面で非常に実りある3日間であった。

まず1日目は、檜枝岐村役場の職員の方へ聞き取り調査を行った。

2日目は、民宿やなぎやさんのもとでお世話になり、マタギの方が提供するジビエ料理、檜枝岐村の料理を堪能した。

3日目は安宮清水の見学、檜枝岐村の公民館の職員の方へ聞き取り調査を行い、民宿こまどりさんのもとで聞き取り調査を行った。

最終日は、山旅案内所の職員の方、檜枝岐村歌舞伎伝承館の管理人の方に聞き取り調査を行った。

以下、私の事前に調べたことや、現地に出向いて得た様々な事柄について述べていきたい。

まず、私たちが事前調査にて得た檜枝岐村の基本情報とすれば、代表的なものは「財産の共有」であった。財産の共有というのは、村の人々の中で格差が生まれることを避けるために、共同体として足並みをそろえていく為に、財産の共有をするといったことである。そこで私たちは、この「財産の共有」に焦点を当て、現地の方々への聞き取り調査を通して、檜枝岐村の実態をできる限り明らかにしていくという方針をとった。

私たちが調査を通し考えた檜枝岐村の財産共有は、数ある民宿や旅館を抱え、観光地として愛される檜枝岐村で、財産の差異による争いを起こさないために、財産の共有をしているといったものであった。

実際に、2つの民宿への宿泊を通して、どちらの民宿も価格帯、料理のバリエーションが似通っていた点より、お客を取り合う競争をしているのではなく、お客さんを譲り合い、村の良さを伝えることを意識せずとも重要視しているのではないかと感じた。民宿こまどりの星俊秀さんへの聞き取りを行った際にも、「特に共有とかそういうのは考えていないけれど、各民宿が好きなように(運営を)やってたら自然とこういうふうになったかな。」とおっしゃっていたことから、民宿を営まれている方々は自身の利益のためにお客さんを獲得することではなく、村の良さ、日常を伝えることを大切にされているのではない

かと感じた。

また、聞き取り調査を進めていく中で、私は「矛盾」を見つけた。その矛盾は、行政側からのお話と、民宿を営んでいる村民の方との間でみられた。

まず、檜枝岐村の公民館の方への聞き取り調査では、村の空き地についてのお話を聞いた際に、「空き地ができて村の人がすぐに買うからあまり移住者の方が来られない」とお話しされていた。対し、村民の方は「空き地は役場が買ってしまうから、外からくる移住者があまり集まらない」とお話しされていた。このような、聞き取り調査のなかでの「矛盾」は、フィールドワークにおいて非常に重要なものであると考えた。フィールドワークでの聞き取り調査における矛盾は、聞き取りを行った対象の方の立場、考え方、当時の環境などによって生まれるものであると感じた。矛盾は、調査をすれば当然うまれるものである。その矛盾について検討していくことで、フィールドワーク先のさらなる理解や、現地に住んでいる方々の根底にある総意に近づくことができると考える。今回見つけることのできた矛盾からは、「移住者の方がもっと集まってほしい」という共通した思いを感じ取ることができる。

このように、聞き取り調査の中で見つけることのできた矛盾は、単なる意見の相違ととらえるのではなく、そこからみえてくる人々の考え、現地の特徴などに目を向けることが非常に重要となると考える。

村を歩いていると、様々な人と会う機会があった。自転車に乗る中学生くらいの学生、犬の散歩をする女性、農作業をしているご高齢の女性など、様々である。歩いているだけで、この人々は全員私たちに挨拶をしてくれた。挨拶とは非常に些細な事であるが、私はこの点は今回のフィールドワークにおいてこれが非常に重要視すべき点であると考えた。私が現在住んでいる場所では、人々が挨拶を交わす光景を見ることはまずない。それはなぜか。その人を知らないし、興味もないからであると私は考える。

しかし、檜枝岐村の方々は違った。先に述べたように、自転車に乗った子供でさえ、道行く私たちに挨拶をしてくれた。公民館の方は、「この村は小さいから、みんながみんなのことを知っている。だから、あなたたちが外から来た人だってこともみんな知っているんですよ。」とおっしゃった。また、村で一つ噂話が生まれれば、それは一瞬で広まってしまうのだという。学校に通う小学生、中学生は村全体で見守っているため、保護者も安心するのだというお話もあった。

これらからわかることは、檜枝岐村は「共同体」だということである。もちろん、檜枝岐村に住む人々が自分たちを「共同体」であるという認識をもって生活しているというわけではない。住民がみなお互いのことを知っていて、挨拶を交わす。一見些細なことであるが、このようなありかたが、私たちの考える村の平等性、財産の共有に繋がっているのではないかと考える。自身の利益のために競争心を燃やし、他を追い抜かすことばかり考えているのではなく、村への愛や、村の良いところ、村での日常を外から来た人間へ伝え

ていく。そして、移住者獲得や村の繁栄を目指していく。このような考え方は非常に美しく、地域づくりを行っていくうえで大切にしていけるべき点であると考えた。

まとめ

今回の国内研修制度を利用させていただき、フィールドワークを行ったうえで私が感じたことは、先にも述べたように事前に調査していたり椅子に座って受動的になっているだけでは絶対に得ることができなかった情報や、フィールドワークにおいて大切な事、現地に足を運んだからこそ感じられる空気などを感じたりすることができた。

今回のフィールドワークにおいてうまくいかなかった点、逆にうまくいった点をよくまとめなおし、今後のゼミナールの活動や、自身の学びにつなげていきたいと考えた。

終わりに

今回の国内研修制度において事前準備に協力してくださった方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、現地でお話を聞かせていただきました檜枝岐村役場の職員の方々、檜枝岐村歌舞伎伝承館の管理人の方、公民館の職員の方々、民宿あづま屋さん、民宿やなぎやさん、民宿こまどりさんに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。